第１回　深作欣二という名の《王道》～その１

■時代劇の「王道」とは

「時代劇」というと、多くの方が「勧善懲悪のワンパターン」に代表される《古臭い》表現方法こそが《王道》であり、基本的には「観客・視聴者の中心は高齢者」という認識をお持ちのことだろう。が、それは全くの誤解だ。

時代劇の《王道》。それは、たえず《現代》と向き合い続ける《変革の姿勢》だと筆者は考える。

明治に映画製作が開始されてから、マゲモノは「旧劇」と呼ばれ、伝統芸能の延長線上に位置づけられていた。それが大正になり、江戸時代の演目をそのまま映画化するのではなく、最新の表現手段をもって江戸時代の人物たちに同時代の空気を仮託する映画群が登場する。これらを「旧劇」とは違うものとして売り出すために付けられた名称が「時代劇」であった。つまり、「時代劇」とは作り手たちが《現代》と格闘しながら生まれるものであり、そこには本来、「新しさ」や「現代性」が伴わなければならないのだ。

事実、大正から昭和にかけて、伊藤大輔、山中貞雄、溝口健二、マキノ雅弘、黒澤明、沢島忠、五社英雄、工藤栄一といった幾多の革命児が自分たちの生きる時代の空気と正面から向き合った野心的な時代劇を観客に提供、「現在進行形のエンターテイメント」であり続けてきた。こうした姿勢こそが、時代劇本来の《王道》なのである。

状況が一変するのが 70 年代後半になってから。この当時、映画各社は大作化に伴うリスクの保険として、安定収入の見込める連続テレビ時代劇の製作を本格化していた。そして、確実に計算できる利益を捻出するため、毎週の放送枠を効率よく埋める表現方法を採るようになっていく。結果、最も生産効率の良い表現方法として広がっていったのが「勧善懲悪のワンパターン」だった。80 年代になると『水戸黄門』『暴れん坊将軍』を頂点とする一大勢力が形成され、時代劇はお馴染のヒーローがお馴染の江戸の小さな町並みのセットの中でお馴染の小さな悪者を退治するだけの、硬直した箱庭的な世界へと収斂されていってしまう。

これらを多くの青年・壮年層は見放し、時代劇は残された高齢者向けへとシフトしていくことになり、さらに安定志向に拍車がかかった。そして「マンネリ」と揶揄される《古臭い》表現へと堕落していった。

このような風潮に敢然と反抗し、「現在進行形のエンターテイメント」としての時代劇本来の姿を追い求め、時代劇の《王道》を復活させようとしたのが、深作欣二であった。70 年代から 90 年代にかけて、深作は時代劇という舞台において、あらん限りの手間隙をかけながら時にはハードボイルドに、時にはファンタジックに、時代劇の常識を打ち破る演出をもって、時代劇から離れつつあった同時代の青年・壮年の観客・視聴者たちを熱狂さ

せていく。
　今回はそうした時代劇の中から、まずは《王道》形成への準備段階ともいえる、若々しい２本を紹介したい。

■『必殺仕掛人』（テレビシリーズ／1972～73 年／松竹＝朝日放送／出演：林与一、緒形拳、山村聰）

　原作は池波正太郎による二本の中篇小説『殺しの掟』と『おんなごろし』で、いずれも、金をもらって人を殺す《闇の殺し屋》「仕掛人」の生き様を描いたピカレスク小説である。そして、「意図的に既製の時代劇を壊し、時代劇らしくない時代劇を作る」という朝日放送の山内久司プロデューサーの意向を受けて、シリーズの流れを決定付ける第一、二話の監督に指名されたのが、時代劇はテレビでわずかにしか撮っていなかった深作だった。『座頭市物語』や『子連れ狼』シリーズで知られる時代劇の巨匠・三隅研次を第三話に差し置いての大抜擢である。山内は、深作の《若さ》に賭けたのだ。
　この期待に深作は見事に応える。
　深作演出といえばなんといっても、『仁義なき戦い』（73 年）に代表される、手持ちカメラを駆使した激しく揺れ動くドキュメントタッチの画面によるアクションシーンだ。この手法は本作の前年の映画『現代やくざ・人斬り与太』で開花されたものだが、それを本格的に実戦投入したのが、本作の第一話（脚本・池上金男）だった。
　室田日出男扮する作事奉行は、まだ人が暮している長屋をお構いなしに叩き壊し、自分の腕を試したいがために無実の人間を斬殺する、生粋のサディストだ。これが仕掛の標的になる。
　クライマックス、仕掛人たちの煽動により、長屋の住人や工事人足たちは暴動を起こす。これに追いたてられ、奉行は路地から路地へと逃げまどう。ここで深作は、手持ちカメラを駆使して奉行の主観ショットから捉えた映像を展開。そのグラグラと揺れ動く画面と、それに伴う独特の疾走感により、視聴者の不安感と緊張感を駆り立てていく。重厚な映像が尊ばれる時代劇のカメラワークにおいて、こうした映像が延々と続くことは稀なことだ。それだけに、新鮮な迫力がそこにはある。
　やがて奉行が路地から広場に出たところで、視界が開ける。すると今度は彼方に砂塵が舞い、その向こうから笹笛の音色と共に現れる仕掛人・西村左内（林与一）。これは、当時流行だったイタリア製西部劇《マカロニウェスタン》のスタイリッシュな演出を取り入れたものだ。そしてここでも、剣と剣とを向き合わせる二人の男を手持ちカメラによって切り取ることで、生死を賭けた決闘の雰囲気を盛り上げるのに成功している。さらに一刀の下に斬り伏せられる奉行が血しぶきを上げてのたうちまわる様を、今度は一転してスローモーションにより、これでもかと執拗に映し出していった。

また、『必殺』シリーズといえば、極端な陰影の照明、画面の大部分を小道具やセットで覆う《ナメ》を使ったショットの多用、顔の一部しか映さない大胆なアップの積み重ね……といった人工的でグラフィカルな構図がその代名詞として知られている。これも、「自分たちなりの時代劇表現」を創り出そうと息巻く松竹京都（当時は京都映画）の若手スタッフの、当時ではいわば邪道ともいえるアイディアを深作が楽しんで、進んで受け入れていったことに始まっている。

こうした既製の枠組みに対する深作の挑戦的な演出姿勢が、長きにわたる『必殺』シリーズという名の《なんでもあり》の歩みの第一歩を切り開いてみせた。同時に深作もまた、ここで《深作流アクション演出》の最終的な実験を成し遂げたといえる。そして、翌年の『仁義なき戦い』へと雪崩れ込んでいくのである。

■『柳生一族の陰謀』（映画／1978 年／東映／脚本・野上龍雄 、松田寛夫 、深作欣二／出演：萬屋錦之介、松方弘樹、千葉真一ほか）

1950 年代、東映は時代劇映画で業界の覇権を握る。60 年代に入り失速するものの、60 年代後半からは任侠路線で息を吹き返し、再び頂点に返り咲く。この路線も失速しかけた時に登場したのが深作の『仁義なき戦い』だった。裏切りが裏切りを呼び、昨日までの親分・子分や友同士が騙しあい、殺し合う。そんな欲まみれの生々しく猥雑なドラマを深作は、目まぐるしく動き回る手持ちカメラと、その画面の隅々まで余すことなく躍動する無名のヤクザたちの姿をもって切り取った。映画は、たちまち大ヒット。以降、実際の現代やくざ抗争を題材にした《実録路線》が東映年間プログラムの中心に据えられ、深作は東映のエース監督として君臨することになる。

が、この『仁義～』に始まる《実録路線》は題材の乏しさと刺激の強さもあり、長続きしなかった。そして、東映は 78 年に再び時代劇を映画で復活させる。それがオールスター超大作『柳生一族の陰謀』だった。ここで深作は、初めて時代劇映画の監督を任されることになる。

深作ら製作陣が狙ったのは時代劇版『仁義なき戦い』だった。二代将軍・徳川秀忠の《跡目》争いをめぐっていくつもの勢力が入り乱れ、野心と陰謀の中で血みどろの抗争が展開されていくというものだ。そして、深作は『仁義なき戦い』さながらの荒々しい演出をもって、初めての時代劇映画に挑んでいく。

中でも、主人公の柳生但馬守（萬屋錦之介）の指示よる相次ぐ大虐殺は壮絶だった。

まずは物語中盤。浪人たち（原田芳雄、中谷一郎ら）が公家の行列を襲撃するところから始まる。功名を上げて仕官にありつこうと、それぞれがけたたましい雄叫びをあげながら必死の形相で襲い掛かる。だがそれは但馬守の罠で、彼らは一転して待ち構えていた柳生の鉄砲隊に取り囲まれてしまう。なんとか生き抜こうと走り回る浪人たちと、そこに容赦なく降り注がれる砲弾の雨嵐。その中で名もなき無数の浪人たちは次々と無惨に倒れて

いく。
次の虐殺は物語の終盤。柳生の裏仕事を手伝ってきた忍者群団・根来衆を、但馬守は口封じしようとする。そして、根来の里の全てを殺し尽くす命令を下す。命令を受けた柳生一門は、忍びの者たちはもちろん、女子供にいたるまで、徹底的に撫で斬りにしてしまう。
いずれのシーンも深作得意の手持ちカメラが、斬りかかる者たちと逃げ惑う人々の双方の姿を追いかけていく。その結果、阿鼻叫喚の様子を生々しく描き出してみせている。そこで展開されるのは、『仁義なき戦い』をさらにスケールアップさせた目まぐるしい大殺戮の映像だった。
それに加えて、柳生十兵衛に扮した千葉真一や志穂美悦子、真田広之らＪＡＣ総出演によるアクロバティックなアクションの連続や、十兵衛による三代将軍・家光（松方弘樹）暗殺、その首を抱えた錦之介が「夢じゃ、夢じゃ、夢でござる！」と絶叫する大芝居で終わるラストまで、とにかく間を詰めてハイテンションなまま、見せ場が次から次へと展開していく。
ひたすらパワフルに押し切る、70 年代の深作演出の真骨頂がそこにはあった。
そしてもう一点。『柳生一族の陰謀』における深作の功績で忘れてはならないのが、映画史上最強の公家・烏丸少将（成田三樹夫）という異様なキャラクターを生み出したことだ。
顔を白く塗り、雅な衣装に身を包み、甲高い都訛りで話し、ヒステリックに笑う……一見すると、なんともナヨナヨと弱そうな典型的な《お公家さん》である。やることと言えば、将軍の跡目相続争いをする二つの派閥を互いに煽ることで漁夫の利を得んとするセコい策謀のみ。いかにも食えない感じのする、小ズルい悪党だ。
だが、この男をこれだけで終わらせなかったのが、深作の深作たるところだ。実はこの公家、剣をとれば途端に人が変わるのだ。束帯（公家の衣装）特有の長い袖を鮮やかに舞わせながら、眼光鋭く、重々しい切っ先で柳生一門を次々と血祭りにあげていく。しかもその間、逃げ惑う柳生を高慢に見下ろし、真っ白い顔に不気味な笑顔を貼り付け、ひっくり返りそうな裏声であざ笑い続けながら斬りまくる。
このマンガチックな妖しい魅力をもつキャラクターを、当時はニヒルな悪役で知られていた成田がコミカルかつハイテンションに演じたものだから、観客の多くが度肝を抜かれたと言われている。これは、芝居では寡黙な二枚目を演じながら、酒の席ではクダけた感じになる《日常の成田》の面白さに気づいた深作が、なんとかその二面性を映画の中に持ち込めないかと思案し創作したキャラクター。この発見が、80 年代以降の深作時代劇の《王道》の原点となる。
生々しく毒々しい暴力的リアリズムのイメージが強い深作だが、80 年代以降の時代劇映画となると、その自由の利くフィールドを縦横に利用して、一切の枠に囚われることなく、フィクショナルに誇張されたケレン味あふれる摩訶不思議なキャラクターたちを好んで登場させている。その端緒となったのが、この烏丸少将だったのだ。

そして深作は、自らの創り出した魑魅魍魎たちと時に戯れ、時に暴れながら、時代劇映画の《王道》を突き進んでいくことになる。
それについては、また次回。

【DVD 情報】
『必殺仕掛人』VOL.1～9（キングレコード）
『柳生一族の陰謀』（東映ビデオ）